

オルタナティブな学校に通う不登校経験者のリアリティ —選択要因と学校への意味づけに着目して—

柊 澤 利 也

1. 問題設定と先行研究

本稿の目的は、オルタナティブな学校に登校する不登校経験者に着目し、かれらがオルタナティブな学校に対し如何に意味づけをしているのかを明らかにすることにある。

『義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律案』が成立し、「不登校児童生徒に対する教育機会の確保」に力がそそがれつつある。ここでは学校以外の場での多様な適切な学習活動の重要性が触れられており、教育機会の確保の一助となりうるであろう。

しかし、教育機会の確保は義務教育段階に限らず後期中等教育段階においても重要視されている。不登校生の8割は学校（高校）へ進学するなか（文部科学省 2014）、後期中等教育機関はかれらにとってのセーフティネットとしても機能している（伊藤 2013）。また高校進学率が9割を超えたことで、高卒学歴が持つプレミア価値が失われてしまったなか、高校に進学することはナショナルミニマムの保障という観点からも考えなければならなくなってきた（相澤ら 2014）。

森田（2003 p. 25）が前期中等教育機関を終えた不登校経験を後期中等教育機関や職業システムへとつなげていくための支援の必要性に言及するように、後期中等教育段階が不登校経験者にとって如何なる場となりえているのかという不登校経験者の“その後”に着目する必要性もみえてくる。だが不登校経験者の“その後”に焦点を当てた研究に乏しいのが実情である（伊藤 2009）。

後期中等教育段階でも教育機会の確保は欠かせないなかで、全日制高校を筆頭とした高校だけではなく、それとは異なるタイプの学校や学校教育法第一条に位置づけられる「学校」とは異なる「オルタナティブな学び舎」（菊地栄治・永田佳之 2001）に進む者も一定数いる。そのためか、フリースクール研究（例えば貴戸 2004, 森田 2008）に留まらず、サポート校研究（内田 2014, 2015 など）も注目を浴びている。

だが不登校・中途退学者に向けた公的、つまり一条校に位置づくチャレンジスクール（東京都）、クリエイティブスクール（埼玉県）も存在する。こうした現象はオルタナティブな学びの舎も含め「不登校トラック」（山田 2009）と名付けられ、チャレンジスクール等に不登校経験者が多く進学している。つまり、オルタナティブな学びの舎外の後期中等教育機関にも目を向ける必要がある。なぜならば、一条校ではない「オルタナティブな学びの舎」だけではなく、チャレンジスクールなどの後期

中等教育に通う不登校経験者にも着目なくしては、不登校経験者の“その後”を表出するとはいえないためである。そこで本稿は「オルタナティブな学びの舎」と対比して、チャレンジスクールなどを「オルタナティブな学校」と位置づけながら、オルタナティブな学校に通う不登校経験者のリアリティに迫っていきたい。

ところで、不登校研究として、その原因に関するものが蓄積されてきた（樋田 2001, 貴戸 2004 など）。だが、先の不登校経験者の“その後”を検討するならば、後期中等教育機関における不登校経験者が如何に描かれてきたのか、と疑問が生じる。そこで本稿では“その後”に関する研究を概観することとする。オルタナティブな学びの舎に位置付くサポート校の生徒に着目した内田（2015）は（不登校・）高校中退経験を持つ生徒が再登校する学校／教育施設が増加しているとはいえ、現代社会においては未だ「普通の高校生」であることへの強い価値規範が存在する可能性を指摘する。それによると「学校制度からの逸脱者」としてのスティグマを付与されたサポート校生徒は、そのような社会的な価値規範との相互作用のなか、「前籍校」の制服を着装することで「普通性」の獲得・補償を目指すのだという（内田 2015, p. 11）。つまり非一条校のサポート校生は、一条校である学校制度に「普通性」という意味づけを行っている。

先述のとおり、一つに進学率が98%を超え、義務教育段階に限らず「高卒」の重要性が高まったことで（相澤ら 2009）、「高卒資格」を得ようとする不登校経験者の存在が指摘できるが、それらのみがオルタナティブな学校を選択した直接的要因と言い切ることはできない。オルタナティブな学校であるチャレンジスクールへの登校継続要因を探った研究（伊藤 2009, 柊澤 2015）もあるが、オルタナティブな学校に対する選択要因やそこへ如何なる意味づけがなされているかは明らかになっていない。また内田（2015）を踏まえると、不登校経験者は一条校であるオルタナティブな学校に通うことで「普通性」を既に獲得してしまっていることとなる。オルタナティブな学校に通う不登校経験者は学校に如何なる意味づけをしているのであろうか。

本稿は、不登校経験者がオルタナティブな学校であるチャレンジスクールに通うことで「普通性」を獲得したと考えられる不登校経験者がオルタナティブな学校に登校することを如何に位置づけているのかというリアリティに迫ることで、かれらにとっての「学校」に対する意味づけを表出したい。

2. 方法

本稿はオルタナティブな学校に通う不登校経験者から得たデータをもとに論を進める。そのオルタナティブな学校として、東京都立高等学校のチャレンジスクールが舞台となる。筆者は5校のチャレンジスクールに調査を申し込み、それぞれの学校で学校長・副校長・教員のいずれかの方々からヒアリング調査を実施し、そのなかで調査実現可能性の観点から3校のチャレンジスクールを選び、在校生8名・卒業生15名から聞き取り調査を実施した。そのうち不登校経験のある10名を抽出した。全校から聞き取り調査を実施していないことから、本稿がチャレンジスクールの一般性を明瞭に実現できていると言い切ることは課題として挙げられるものの、5校中3校といった過半数の学校において

調査を実現できたことは一定程度の一般化が実現できたといえよう。

調査実施期間は2014年10月～2015年10月である。以下の表1は、本稿において実施された半構造インタビュー対象者のデータである。調査時に心がけたことは、不登校経験等の個人のプライバシーに関わる可能性がある質問を、なるべく筆者側から行わないということである。特に中学時の経験に関する質問は、調査対象者自らが語ることがない限り、極力避けている。本稿は「不登校経験者」が対象であるため、「私は以前、不登校経験で……」や「私は不登校ではなかったのですが……」等、自ら不登校経験の有無に関して語ってくれた者に関して分析対象としている⁽¹⁾。また1対1の面接方式でなされたものと、1対3の面接方式でなされたものがある。それは、調査対象者が1対1の面接方式を避ける傾向があったためであるが、可能な限り1対1の面接方式で調査を実施した。なお、調査時間は20分から1時間となっている。

表1が示す通り、いじめが原因で不登校となるケースが多く見られた。また本調査からは、家庭の劣悪な社会経済的要因に起因した怠学傾向や非行傾向を確認することはできなかったため、脱落型不登校（保坂 2000）が含まれていない。そのため本校で対象とする不登校経験者は、脱落的要因を含まず心理要因によるものであるといえよう。

表1 インタビュー・フィールドノーツデータ一覧

名前（仮名）	性別	不登校になった要因			
		心理的要因	いじめ	脱落要因	備 考
藤田	男	○	○	×	中学時ほとんど学校に行っていない。以前、夜間定時制に在籍。
吉田	男	○	○	×	中学時ほとんど学校に行っていない。
田中	女	△	?	×	私立の中学校を不登校になる。
安藤	女	○	?	×	小学6年生の時から不登校。保健室登校経験あり。
木村	男	○	○	×	中学時いじめにより不登校になり、フリースクールへ。
山田	男	○	○	×	中学時いじめにより不登校になり、フリースクールへ。中学卒業後夜間定時制に在籍。
小野	女	○	○	×	中学時の教師により、中学時ほとんど学校に行っていない。
工藤	女	○	×	×	中学時不登校になる。夜間定時制に在籍するも、数か月で辞める。
佐藤	男	○	○	×	いじめにより不登校。関東圏外から入学。
横山	男	○	×	×	担任教師とのトラブルにより不登校。

3. 分析

3.1. オルタナティブな学校への選択要因を探る

オルタナティブな学校選択要因をみてみると再登校に関する語りが多く得られる。まずは田中と山田の語りからみてきたい。

それ（高校へ行きたいということ）はありましたね。なんか中学卒業してそのまま正直な話、働きたくなーなって思ったんで。なんかよくわかんない仕事すんなら、高校〔に〕行きたいし、そこでなんかあったら、大学とか行けたら面白いかなって。【山田 括弧筆者作成（以下、同様）】

山田の語りをみてみると、積極的とは言えないものの「高校に通いたい」という思いのもとチャレンジスクールを選択していた。次にこの「高校に通いたい」という語りに含意するものは何かを探っていきたい。工藤は高校に行くことに対し以下の通り語っている。

筆者：高校には通いたかった？

工藤：周りの子（高校に登校している子）と同じことをしたいなって。【工藤】

工藤は、筆者による「高校には通いたかった」という問いに対して「周りの子と同じことをしたい」と語ってくれた。工藤は自身の周りの人が高校に行っているという状況に対して、自分も同じように高校に通いたいと考えていた。工藤にとって「高校に行く」ということは自身の周りの人と同様の行動をすることに価値をおいているのかもしれない。この工藤の語りから解釈できることは、学校（高校）に通うものは皆、少なからず自明視をもっているということである。

このように解釈するのであれば、「高校に通いたい」という思いに含意するものは、「高卒資格」といった要因だけでなく、友人や中学時の同級生と同じように「高校に行く」という自明性に駆られていることも要因の一つともいえるかもしれない。しかし、先の山田の語りに示されていたように、容易に「高校に行きたい」実現することはできない。こうした困難さをより具体的にみていくこととする。

普通の学校（全日制高校）っていうかあの、〈中略〉通信簿で全部評価が1になってしまったので、その時点で通信簿がオール1だと入れるのがダメだったりするので。その時点で、成績とか関係なく入れるところっていうのがあって。それで、私も定時制だといやだって言ったんですけど、1回ここに見学に来て、ここなら通えるなってちょっと思ったところがある。【小野】

小野は、不登校であるとどのような困難が生じるのかという具体的な答えを語っている。小野に

とって全日制高校へのハードルが高いため、「成績とか関係なく入れる」チャレンジスクールの「入試制度」を理由に、チャレンジスクールであれば「通える」と思えたと言語。つまり、自分自身の状況を踏まえながら、チャレンジスクールの入試成績と見学に来てみての学校の雰囲気を検討した結果、チャレンジスクールであれば「通える」と思えたことで、チャレンジスクールを選択したことがわかる。これを補完するために、佐藤の語りをみてみたい。

筆者：ここが高校だっていう認識で、きたんですか。

佐藤：そうなんです。

筆者：ここがチャレンジスクールだっていうことは知っていたんですか。

佐藤：もちろん。

筆者：それについてどう思いましたか

佐藤：最初、ちょっといやだなと思いました。

筆者：それはどうしていやだと。

佐藤：やっぱりこうあの自分は全くなんもできない人間で、高校に行くっていうのは恥ずかしいではないですけど、あの力不足なのを実感してましたし、精神的にも、肉体的にも。それで高校ではあるけれど、どうかな一通じるかな？って。心配してました。【佐藤】

佐藤の語りは不登校経験者が高校に通うことの困難さとチャレンジスクール選択の関係をみていくには重要な語りである。佐藤は不登校時の自分を「自分は全くなんもできない人間」と否定的に解釈し、不登校であった自身の状況から自分自身を「力不足なのを実感」し「高校へ行くこと」に不安を覚え、自分自身の力が「通じる」か否かを不安に思ったと言語している。この語りから、高校であるチャレンジスクールを自分自身の「力」が「通じる」学校と捉えていたことがわかる。

小野と佐藤の語りをまとめると、自身の置かれていた状況（不登校）を踏まえ、自分の「力不足」が「通じる」か、否かに不安を感じるが重要視され、「こういうところ（チャレンジスクール）」であれば「通える」（小野）・「通じる」（佐藤）と思えたのではないだろうか。要するに、かれらにとって「通じる／える」と思えることが、「高校に通いたい」という思いを叶えるために重要な要素となるのである。「高校に通いたい」かれらにとって、全日制高校へのハードルは高く、断念せざるをえない。つまり小野はチャレンジスクールを選択したとも解釈できるが、そこには全日制高校との比較が生じており、全日制高校に代わる学校を希望し、その代わりの学校がチャレンジスクールであったといえる。

ここから全日制高校とチャレンジスクールとが比較され、「通じる／える」という要因をもつ後者を選択していることが明らかになった。こうしたオルタナティブな学校に登校する不登校経験者が全日制高校と自身が登校する学校を比較としながら、「高校に通いたい」という思いを実現しようとしていた。次にかれらがオルタナティブな学校をどのように位置づけているのかを見ていくことと

する。

3.2. どこに登校するのか

本節では、かれらが全日制高校に対しどのような認識をしているのかをみていくために、かれらとの会話の中で使われた全日制高校に関する語りを紹介し、全日制高校に対する捉え方をみていく。かれらとチャレンジスクールについて話していると、全日制高校との比較が頻繁に語られる。

《「なぜチャレンジスクールに通いたいと思ったのか」と質問した際の一コマ》

- ずっと学校を休んでで、普通の高校に進学できなくなっちゃったので、それで母が色々探してきてくれて、どうしても高校には行ってほしいって言うんで、受けたらどう？って。
- ここじゃなかったら、普通の、普通のっていうか、なんつうか普通の都立とか行っていたら、最終的に退学になっていたと思うんですけど、3年卒業できないので。【小野】

このように自然に「普通」「普通の学校」という言葉を発していた。そこで、筆者はこの「普通の学校」、「普通の都立」とはどういう学校なのか以下のように質問した。

筆者：普通の学校っていうのは、都立の？

小野：都立とか全日制とか。

筆者：そのことを指しているんですね。

小野：はい。【小野】

上記の通り、「普通の学校」や「普通の都立」という語りは、全日制高校を指していることが分かる。本節では、この全日制高校＝〈普通〉の学校をもとに、かれらが全日制高校と比較し、チャレンジスクール自体をどのように捉えているのかを明らかにしていきたい。

《筆者が総合学科の科目について質問した際の一コマ》

うーん、楽しかったのは声優講座とか、プロの先生に教えてもらうっていう機会が普通の高校生だとないと思うんで、高校通いながらもスクール通いながらもできると思うんですけど、普通の高校に通いながらできるってのは大きいと思います。【工藤】

まずここで着目したいのは、工藤が〈普通〉を2側面で捉えていることである。まず、工藤は総合学科で開講される授業を「機会が普通の高校生だとな」と語っている。つまり、全日制高校の生徒はそうした機会がないということを示し、この場合の「普通」は全日制高校を指していることがわかる。これは先の小野の語りと一致する。

しかし、総合学科の授業を受けることを「普通の高校に通いながらできる」とも語っている。この場合の「普通の高校」とは、チャレンジスクールを指しており、チャレンジスクールを〈普通〉とも捉え、チャレンジスクールが曖昧な位置にいたることがわかる。ここで着目したいのは、チャレンジスクールであっても、全日制高校＝〈普通〉の高校に通っているのと類似の経験が可能であると認識していることである。つまり、工藤は「普通の高校に通うことができる」ことを、要するに全日制高校に所属することをポジティブに捉えていることがわかる。

このように工藤の語りから全日制高校＝〈普通〉の学校をポジティブに捉えていることが明らかになった。そして全日制高校を〈普通〉と捉えながら同時にチャレンジスクールを〈普通〉とも捉えており、チャレンジスクールが曖昧な位置にいる。この曖昧さを田中の語りからも理解できる。

〔チャレンジスクールを選んだ理由は親と話してみても普通っぽいから。【田中】

この田中の「普通っぽい」という語りは何を意味するのであろうか。田中は〈普通〉という言葉を用いて、1部を選択した理由を語ってくれた。つまり、田中は〈普通〉である全日制高校との対比により、チャレンジスクールの制度を〈普通っぽい〉と「っぽい」という曖昧な言葉を用いて位置付けているようである。先の工藤の語りにあった「曖昧さ」を捉え直すのであれば、チャレンジスクールを〈普通っぽい〉学校と位置付けることが可能であろう。こうした〈普通っぽい〉に関する語りをした木村の語りもみていきたい。木村は〈普通〉を用いて田中と同様に1部を選択した理由に関して、木村は以下のように語っている。

健全な感じっていうか、普通の学校と同じノリかなって感じですね。【木村】

この語りの「普通の学校」とは全日制高校を指しているようである。これは先の小野の語りと共通し田中の語りとも共通する部分を含んでいよう。そして木村はチャレンジスクールを「普通の学校と同じノリ」と位置づけているように、田中の「っぽい」のように曖昧なニュアンスを用いて説明している。田中と木村は、こうした全日制高校と同様の朝から学校へ登校するという制度を、田中の言葉を借りれば〈普通っぽい〉と解釈している。これはチャレンジスクールを全日制高校とは異なる学校であるが、全日制高校と共通する面からチャレンジスクールを〈普通っぽい〉という認識しているのであろう。田中と木村にとって、全日制高校のような学校生活となりうると解釈しているのではないだろうか。

工藤・田中・木村の語りをまとめると以下になる。全日制高校を〈普通〉の学校と捉えながら、チャレンジスクールをその〈普通〉と同類あるはそれに近い学校要素を持つ学校と位置付けていた。かれらが全日制高校＝〈普通〉に通うことをポジティブに捉えているとすると、チャレンジスクールという〈普通っぽい〉学校に通うことにより少なからず充足感を得ているのかもしれない。しかし

ながら、〈普通っぽい〉学校とは如何なるものか、より具体的に見ていく必要がある。山田と松坂は〈普通〉である全日制高校との対比から、以下のように語っている。

山田：（チャレンジスクールは）高校ばくなくない高校でいいのかな。

松坂：うん。学校なんだけど学校ばくなくないんだよね。 【山田・松坂】

山田と松坂は、「ばくなくない」という曖昧な表現を用いてチャレンジスクールを説明した。この「高校」が「全日制高校」、つまり〈普通〉の学校を示していると解釈すると、チャレンジスクールは〈普通っぽくない〉学校とも言い換えることができよう。この語りはチャレンジスクールを〈普通っぽい〉学校と捉えていたのとは反対の語りといえる。チャレンジスクールを〈普通っぽくない〉学校と捉えうるならば、より全日制高校とチャレンジスクールとの間にある「曖昧さ」が浮き出てくる。

《「チャレンジスクールに如何なる生徒が通っているのか」と質問した際の一コマ》

みんなやっぱ一辺学校でいやな思いをしてる子おおかったから、他人にやさしい子が多いんじゃないかなって思いますね。その辺がやっぱりリハビリ的な部分で普通の学校よりはいいと思います。いままで不登校とかされた方とか。【工藤】

工藤は「他人にやさしい子が多い」というチャレンジスクールの特徴を、「普通の学校よりはいい」と捉えている。この語りはチャレンジスクールと〈普通〉である全日制高校との対比が工藤の中で自然に為されていることを示す。これは先の小野の「普通の学校」という位置付けと一致し、チャレンジスクールと全日制高校が異なるという認識を工藤がしていることがわかる。つまり工藤自身は〈普通〉をポジティブに捉える一方で、〈普通〉との差異もポジティブに捉えていることがわかる。

以上のように、チャレンジスクールが全日制高校との曖昧に位置づけられており、そうした曖昧さがかれらにプラスに働いている側面が明らかになった。しかしながら、こうした曖昧さはプラスの側面ばかりではないようである。そこで以下に藤田の語りを紹介する。この語りは筆者がチャレンジスクールの授業について質問した際に、突然藤田が語ったものである。

基礎の基礎、基盤からやっていうので、正直言って自分からしたらありがたいんですけど、[中略]正直いって、チャレンジスクールなので、当然そういういろんな問題があった方がいらっしゃるじゃないですか。共通して理解とかできるっていうのはいい面あると思うんですけど、反面でどこかなにもいってなくても、そういう問題があったことで、自分を悲観したりして、自分がこういう問題があったから、なんかたぶん基礎の基礎なので自分の前通っていた定時（夜間定時制）の授業からしても授業レベル自体は最初は低いと思って、でもやっぱり問題があったから、おれはこういう最初からやるんだなってどっか思っている方も当然いるかなっと思うんです。【藤田】

藤田：チャレンジスクールなので、なにかをしたいとかを思って入学されていると思うんです。

ただ、なにかの拍子に、自分を悲観した面でみたときに、チャレンジスクールっていうのが逆になんか大きな壁じゃないですけど、そういうので自分にとってマイナスなイメージになってしまうのではないかなっていうのはあります。

筆者：認識はチャレンジスクール，良い意味でも悪い意味でも？

藤田：当然あると思います。もちろん，良い意味でもあると思いますし，なにかの拍子に悪い面にかわって転換してしまうのが，個人的にはあると思います。【藤田】

このように藤田はチャレンジスクールで実施される授業に関する質問に対して，突如チャレンジスクールに在籍するうえで生じ得る葛藤について語ってくれた。これは「葛藤はありますか」等の筆者による質問に対しての答えではなく，藤田自ら上記の語りをしたことを考えると，藤田からチャレンジスクールにおける葛藤の重みを感じることができるといえる。藤田曰くチャレンジスクールに通う生徒は「そういういろんな問題があった」という語りに示されるように，「基礎の基礎」から学ぶ必要があるため，「自分を悲観」することがあるがあるという。つまり，チャレンジスクールという〈普通っぽい／くない〉学校で授業を受けることが葛藤につながる可能性を秘めているのである。

4. まとめと考察

本稿は不登校原因研究ではなく，不登校経験者の“その後”として選択したオルタナティブな学校において，当事者が不登校状態から登校状態となった事象に着目し，大きく分けて2点を明らかにした。1点目は，チャレンジスクールがかれらにとって「通じる／える」要素を持ち合わせていたため，かれらの消極的あるいは積極的ともとれる「高校に通いたい」という思いを実現できる場となっていたことである。2点目は，かれらはチャレンジスクールというオルタナティブな学校を〈普通〉というワードで描き，全日制高校を〈普通〉の高校，チャレンジスクールを〈普通っぽい／くない〉曖昧な学校として位置づけていた。そして，かれらは全日制高校＝〈普通〉の高校をポジティブに捉えながら，チャレンジスクール＝〈普通っぽい〉学校という曖昧さから生じるプラスとマイナスの両側面に葛藤していた。

内田（2015）はサポート校生の「普通の高校生」であることへの強い価値規範と「前籍校」の制服を着装することによる「普通性」の獲得・補償に言及している。チャレンジスクールというオルタナティブな学校に通う者からも〈普通〉や〈普通っぽい〉という「普通性」がみえた。これを如何に解釈することができるだろうか。サポート校は「学校」でないため，そこに通う者は「普通の高校生」であることへの価値を置く。一方でチャレンジスクールという公的なオルタナティブな学校は，学校教育法に定められた「学校」であるため，そこに通う者は“本当の”「普通の高校生」である。だが，チャレンジスクールに通うかれらの語りからは，チャレンジスクールは〈普通っぽい／くない〉学校として位置づけられていた。つまり，かれらは一条校であるチャレンジスクールに通う“本当の”「普

通の高校生」であるにもかかわらず、かれらにとっては「普通の高校生」とは言いきれないのである。そのためチャレンジスクールという場が時として葛藤を生じさせる可能性も秘めている。

このようにみると〈普通〉というワードを手掛かりにすることで、かれらが「登校」に対して如何に意味づけを為しているかの示唆ができる。1つに、かれらにとって「不登校者」から「登校者」と変わるのか、「不登校者」として留まるのか、つまり登校という〈普通〉へ回帰するのか否かが重要な意味を持っているといえる。かれらは各々の理由で小・中と不登校となったものの、後期中等教育機関段階で、「不登校者」から「登校者」へと移行、つまり〈普通〉へ回帰したのである。「高校に通いたい」という思いは、つまり「不登校者」から「登校者」への移行の思いが含意していることも解釈できる。サポート校も「不登校者」から「登校者」への移行を可能とさせる場となっているかもしれない。

2つ目にかれらの語りを分析すると、どこの「登校者」となるかが重要となることがわかる。要するにかれらはサポート校等に通う「登校者」となるのではなく、「学校」である場での「登校者」に移行を思い描いてかもしれない。だが、容易に全日制高校という〈普通〉の学校に登校することはできない。そこでかれらは、〈普通〉を全日制高校としながら、「通じる／える」チャレンジスクールを選択した。なぜならばチャレンジスクールのようなオルタナティブな学校を〈普通っぽい〉学校と捉えていたからである。〈普通〉の学校という全日制高校へ〈普通〉に「登校者」となることは叶わないため、望み通りの〈普通〉への回帰が可能となったわけではない。しかし、〈普通っぽい〉学校に登校することで、それなりの〈普通〉回帰することで収まることができたのであろう。ただその反面、既に明らかにしたように〈普通っぽい／くない〉という曖昧さが含意する学校において、葛藤も生じうるのである。まとめると、〈普通回帰〉には2つの含意が示唆される。チャレンジスクールに通うことで、「不登校＝普通でない」から「登校＝普通」という登校者となり、そして〈普通っぽい〉学校生活を送ることができるのであろう。

例えばサポート校の生徒は学校に属していたいため、学校に属することを〈普通〉と捉えていたため、制服着用することで学校という場（普通）に回帰していたのかもしれない。サポート校において、制服着用が示すのは、学校のような場に移行しているということである。それは不登校経験者が「登校者」に移行しても、場が「学校」でないことで、サポート校が「学校」を疑似体験する場として機能しているのではないか。

最後に本稿の課題を3つ指摘しておきたい。1点目は「不登校」像への限定的アプローチである。不登校経験者は、従来の研究が示してきたとおり、多様で一元的ではない。そのため、本稿が明らかにした「不登校経験者」像から全不登校経験者像を明らかにしたとはいえない。2点目はデータの汎用性である。オルタナティブな学校はチャレンジスクールに限定されないことから、本校はそれを網羅した研究とは言い切れない。3点目は、チャレンジスクールに通う者が全て不登校経験者とは限らないことである。ただし、こうした課題が含まれながらも政策的な立場のみから後期中等教育の課題・成果をみるだけでなく当事者の意味世界を明らかにしたことは、学術的・政策的な意義がある

と考える。

注(1) 長期欠席の理由である「病気」「不登校」の厳密な線引きは難しい(保坂亨 2000)が、本稿では自らを「不登校」語った者を対象としている。

参考文献

- 相澤真一・児玉英靖・香川めい, 2014, 『＜高卒当然社会＞の戦後史』株式会社新曜社。
- Furlong, Andy・Cartmel, Fred, 2006, *Young People And Social Change*, Open University Press (=2009, 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸山紗子訳, 『若者と社会変容 リスク社会を生きる』大月出版。)
- 樋田大二郎, 2001, 「不登校現象からみる学校教育の変容—登校の自明性の低下とパノプティコンの拡大—」『教育社会学研究』第68, pp. 25-43.
- 柊澤利也, 2015, 「不登校経験者が「高卒」資格を得るまで: チャレンジスクールの事例から」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』(23) pp. 13-22.
- 保坂亨, 2000, 『学校を欠席する子どもたち——長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会。
- 伊藤秀樹, 2009, 「不登校経験者への登校支援とその課題—チャレンジスクール, 高等専修学校の事例から—」『教育社会学研究』第84集, pp. 207-226.
- , 2013, 「後期中等教育のセーフティネットにおける不平等: 高等専修学校に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』52 pp. 117-126.
- 貴戸理恵, 2004, 『不登校は終わらない——「選択」の物語から＜当事者＞の語りへ』新曜社。
- 菊地栄治・永田佳之, 2001, 「オルタナティブな学び舎の社会学—教育の〈公共性〉を再考する—」『教育社会学研究』第68集, pp. 65-84.
- 文部科学省, 2012, 『平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について』。
- , 2014, 『「不登校に関する実態調査」～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～』。
- 森田洋司, 1991, 『「不登校」現象の社会』学文社。
- 森田洋司編, 2003, 『不登校—その後—不登校経験者が語る心理と行動軌跡』教育開発研究所。
- 森田次朗, 2008, 「現代日本社会におけるフリースクール像再考: 京都市フリースクールAの日常的実践から」『ソシオロジ』53(2), pp. 125-141.
- 内田康弘, 2014, 「私立通信制高校サポート校の誕生とその展開——教育政策との関連に着目して」『日本通信教育学会研究論集』平成25年度, pp. 1-15.
- , 2015, 「サポート校生徒は高校中退経験をどう生き抜くのか——スティグマと「前籍校」制服着装行動に着目して——」『子ども社会研究』第21号, pp. 95-108.
- 山田哲也, 2010, 「学校に行くことの意味を問い直す」若槻健・西田芳正編『教育社会学への招待』大阪大学出版会, pp. 77-95.

ABSTRACT

Reality of Students in Alternative School Who Have Experienced School Non-Attendance

Toshiya HIIRAGIZAWA

The purpose of this study is to examine why students who have experienced school non-attendance prefer to go to alternative school (Challenge School). Data collected through interviews and participatory observation resulted in the following findings.

Firstly, students recognize it is easier for students to go to an alternative school in spite of their own experiences of school non-attendance. Secondly, students want to become ordinary. According to this study, the “ordinary” has two definitions. One is “going to school”. The other is “going to ordinary high school”. Alternative schools allow students to become regularized students because alternative schools are a space outside the typical education pathway. However, students can’t always have experiences of an “ordinary” school life through an alternative school.